



母乳を介した乳児への薬物の影響



薬剤は、飲んだあと消化管から吸収され、徐々に血液に移行し、母乳に到達します。ですから、授乳をしてから薬剤を服用するか、児が長い眠りに入る直前に服用すれば、薬剤の影響が少なくできるといわれています。また、母親の血液中と母乳中の薬の濃度は平衡状態にあるため、「溜まっている母乳を搾乳して捨ててから」授乳しても母乳中の薬剤濃度が変わるわけではありません。原則的には、母親が摂取した薬剤の1%以下しか母乳には分泌されず、一般的には、母親への投与量の10%以下なら乳児には安全と考えられています。(一般論ですので、すべての薬に当てはまるわけではありません)。添付文書では、「投与中は授乳を中止すること」と規制されている薬がたくさんあります。このような記載があったとしても、必ずしも危険性が高いわけではなく、実際には授乳を中止させないこともあり、授乳時期によっても対応が異なります。このように妊娠中に比べ影響の出る薬剤は少なくなります。

★判断に迷いましたら、是非、医師・薬剤師に相談ください★



よく授乳婦に処方されている 薬剤の添付文書の記載は？

下記の薬剤は全て母乳に移行しますので、添付文書では「投与をさける」「授乳を中止」などの記載がされています。もちろん、服用しないに越したことはありませんが、お母さんの体調も大切です。実際には問題ないとの判断がされており、授乳は中止せずに使用しています。

- ロキソプロフェンナトリウム
(解熱鎮痛抗炎症剤)
- レバミピド (胃薬)
- セファクロル(抗菌剤)
- ニフェジピン(降圧剤)
- センノサイド(下剤)



参考資料：国立成育医療研究センター ホームページ
「授乳婦と薬」じほう
母乳とくすりハンドブック 大分県薬剤師会
「妊娠・授乳と薬」愛知県薬剤師会
婦人科診療ガイドライン



育児サークル「のびのび広場」

日時：第3水曜日 AM10時30分～11時30分
場所：磐井病院 2階多目的会議室
対象者：お母さんと赤ちゃん(1歳未満)
自由参加・予約不要・無料
参加をお待ちしております！



お問い合わせ

現在妊娠中・育児中の方、その家族や上司の方などの、母乳に関する様々な相談もお受けいたします。

★どうぞお気軽にご連絡ください★

母乳育児推進委員

磐井病院 TEL:0191-23-3452



今回は薬剤科からでした

